

〈研究ノート〉

初年次教育におけるスタディ・スキルの学び —2018年度・2019年度の学校教育学科の実践報告—

伊深 祥子* 内田 徹*

要約

本論は、学校教育学科の人間総合科目群に設定されている「学びの技法」として実施したスタディナビゲーションA・B・C・Dの事例報告である。本学のスタディナビゲーションは初年次教育として位置付けられており、本論では初年次教育のスタディ・スキルに焦点をあてた2018年度、2019年度の学校教育学科の学生の学びと課題を示す。本事例では、スタディ・スキルとして①人前で話す力、②聞く力、③質問する力、④書く力、⑤批判する力、⑥討議する力の6つの力を身につけることを目指した。学生がスタディナビゲーションで学んだことは「文章能力」「学びの方法」「他者から学ぶ」の3つである。この3つの学びは大学での学びの基礎となるものである。

キーワード 初年次教育 スタディ・スキル 文章能力 学びの方法 他者から学ぶ

目次

1. はじめに
2. 研究の目的と方法
3. 育成するスタディ・スキルの方向性
4. 育成するスタディ・スキルの内容
 - 4.1 スタディナビゲーション全体で育成するスタディ・スキルの概要
 - 4.2 スタディナビゲーションA
 - 4.3 スタディナビゲーションB
 - 4.4 スタディナビゲーションC
 - 4.5 スタディナビゲーションD
5. スタディナビゲーションにおける学生の学び
6. 終わりに

1. はじめに

学校教育学科では、人間総合科目の中の科目群の「学びの技法」として、スタディナビゲーションA・B（1年次）、C・D（2年次）が必修科目として計4単位が設置されている。スタディナビゲーションの目的は二つある。一つは、大学で何をどのように学ぶかという問いの答えを見つけることであり、二つは、将来への展望を描き専門性や社会性につながる基礎的な能力や態度を養うことである。

本学、こども学部のスタディナビゲーションは、大学における初年次教育として位置づけられている。山田（2012）は、初年次教育が導入された理由を①学生の変容、②大学をより教育を重視する場へ変革させるような政策の存在、③社会から求められる教育効果の提示の3つに収斂できる^[1]と述べている。さらに山田（2013）は、日本における初年次教育が注目を浴び始めたのは、2000年代半ばのことであり、2008年に初年次教育の発展と学生の成長に寄与することを目指して初年次教育学会が設立された^[2]としている。

文部科学省（2015）は、初年次教育を高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラムであり、高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたもの^[3]としている。また、文部科学省（2019）の調査では、690大学（94%）が初年次教育を実施していることが報告されており、多くの大学で初年次教育が導入されていることが示されて^[4]いる。

このように大学教育に位置付けられた初年次教育の内容について石倉ら（2008）は、初年次教育は更なる専門教育への導入でなければならないとし、「大学の学校化」に高等教育は適切に対処しなければならない^[5]としている。初年次教育の内容として濱名（2008）は、初年次教育の導入について、入学者の多様化による高大連携の必要性、キャリア教育としての位置づけ、学業継続率（retention）、学生成績の上昇との関連について言明しているが、本来中等教育で身につけておくべき内容のリメディアル教育（remedial）を高等教育の卒業要件としての単位認証の対象とはいえないであろう^[6]としている。一方、土居（2010）のように、初年次教育の字面に縛られることなく、初年次教育を社会人としてのマナーを教える「社会への適応」に位置付ける提案^[7]もある。

また、初年次教育の方法として、森ら（2009）は、初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセスを明らかにしており^[8]、楠見ら（2012）は、批判的思考を大学生として学問を学ぶために、さらに、社会へ出て市民として生活する必要なスキルや態度として位置づけ、批判的思考に焦点を当てた^[9]初年次教育を実施している。

以上のように初年次教育は、始まって20年の新しい取り組みであり、各大学でその内容、方法が検討され、多様な初年次教育が実施されている。本論では、こども学部学校教育学科の2期生のスタディナビゲーションにおいて、スタディ・スキルの育成に焦点を当てた初年次教育の実践を報告する。

2. 研究の目的と方法

はじめに、学校教育学科2期生に実施した2018年度、2019年度のスタディナビゲーションA・BとC・Dの方向性を示し、つぎに実施内容の概要と具体的なスタディ・スキルの学びの事例を報告する。最後にスタディナビゲーションD終了後の振り返りの記述から2年間のスタディナビゲーションにおける学生の学びを分析する。分析対象はスタディナビゲーションA・B・C・D（4コマ60時間）を受講した2期生17名の記述である。

講義は、内田・伊深の2名で担当した。スタディナビゲーションA・Bで使用した教科書は吉原恵子ら（2017）『「スタディスキルズ・トレーニング」大学で学ぶ25のスキル』、実教出版である。スタディナビゲーションC・Dでは教科書は使用せず、参考図書として課題図書8冊および、斉藤孝（2011）『声に出して読みたい日本語①』、草思社文庫を使用した。

3 育成するスタディ・スキルの方向性

スタディナビゲーションでは、国立教育政策所が実施した調査（2007）の項目の中で、①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系、③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など、学びへの導入を目的とするもの、および、⑦自校教育、⑧キャリアデザインを実施した。⑥情報リテラシーについては、別にコンピュータリテラシI・II（内田担当）が設定されているため扱わない。

本論で取りあげるスタディ・スキルの育成において、スタディナビゲーションA・Bでは、人前で話す力、聞く力、質問する力、書く力をつけることに重点を置いた。スタディナビゲーションC・Dでは、教職サポートセミナーと卒業論文へのつながりを考え、レポート作成や討議を教職にかかわる内容や語句を対象として実施した。3年次からの専門教育への橋渡しとして、教育にかかわる内容を取り上げることは、教員採用試験に向けての基礎知識の習得にも繋がると考えている。

講義の方法には、AL（=Active learning 学修者の能動的な学修への参加を取り入れた授業・学習方法の総称）を多く取り入れた。ALを実施することで、学生間の交流が深まり、共同で学ぶこと、他者と学ぶことを体験するという大学教育としての意味があるからだけでなく、小学校教員を目指す学生としてALを体験し、教育におけるALの意味と方法を理解することを目的としている。

4. 育成するスタディ・スキルの内容

4.1 スタディナビゲーション全体で育成するスタディ・スキルの概要

表1にスタディナビゲーションA・B・C・Dの概要についてスタディ・スキルの内容を中心に示した。

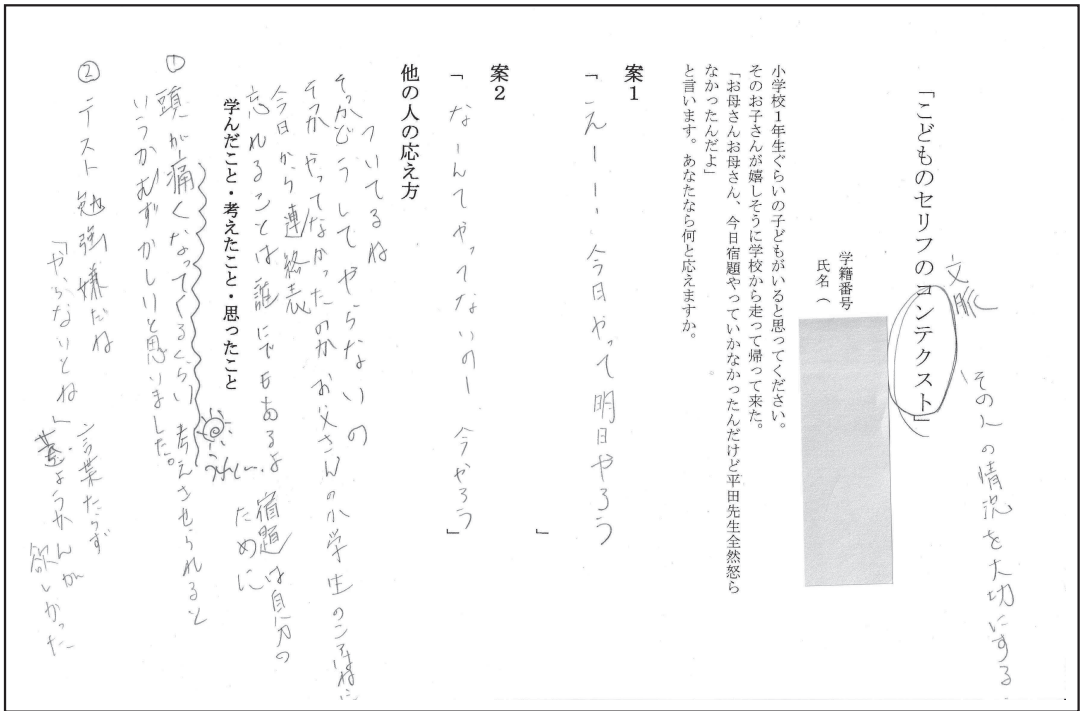
表1 2018年・2019年度のスタディナビゲーションの概要（スタディスキルを中心に）

スタディナビゲーションA			スタディナビゲーションB		
内容	資料・方法	目的	内容	資料・方法	目的
自己紹介	2人組・4人組・全体へと段階を踏った自己紹介	自分を表現する。質問する意味を知る。	本の紹介の仕方（見本）	自分の好きな本を紹介する。（毎週2名授業の初めに実施）	本に親しむ。レジメの見本：「先生はえらい」内田樹
教職入門合宿振り返り	個人記述・共有	事実と感情を分けて考える。	本の紹介（発表）	本の紹介のレジメの相互評価・レジメへの質問	わかりやすいレジメの書き方・著者の紹介
学生生活の過ごし方	学生ガイドブック	ガイドブックの内容を分担して人に説明する。	印象に残った先生	800字 KJ法	子どもにとっての良い教師とは何かを考える。
私の宝物	S&T（毎週2名授業の初めに実施）	人の前で話す。質問する。質問に応える。	文章の要約	眞有先生資料	要約は論文執筆の基礎となる。
インターンシップAの記録	記録用紙	記録の書き方	起承転結	鶴ヶ谷先生資料	何が起きたのかを伝える。
浦和大学建学の精神	「実学に勤め徳を養う」	文章を分担して読む・批判的に読む・批判に反論する。	5W1H	鶴ヶ谷先生資料	客観的な事実を書く。
レポートの書き方	テキスト	作文との違い	接続詞の使い方	学生の論文の修正	文書の質を高める。
間主観的に考える（児童への声掛け）	「子どものセリフのコンテキスト」（平田オリザ）	スタディーナビゲーションCDでの職業の学びへつなげる。	教員採用試験の概要	教員採用試験ハンドブック	自分が目指す職業分野（教員）に関する知識を身につける。
スタディナビゲーションC			スタディナビゲーションD		
内容	資料・方法	目的	内容	資料・方法	目的
声の力	外山盛彦「知的な聴き方」	教師にとっての声の力に注目する。	課題図書の見解	8冊の課題図書を2～3名で読む。討議テーマを決める。	本を読んでレポートを書く。本の内容から討議テーマを設定する。
声に出して読みたい日本語	毎週授業の初めに2名ずつ音読・解説	教師にとっての声の意味を意識する。	課題図書の解説と討議テーマの設定	学生が設定したテーマの討議（2～3グループで討議）討議後テーマについて自分の考えを記述する。（200字・400字）	テーマを設定して、討議の進め方を知る。質問する力。文章を書く力。
レポートの書き方	レポート見本「アクティブラーニング」	レポートの書き方を知る。2冊以上の書籍を読む。引用文献の書き方。	討議を深める	学生が設定したテーマ⑧への400字の記述のキーワードをKJ法で分析する。	ひとつのテーマを深めることを体験する。
調べ学習	2～3名で教育用語を調べ。レポートを書く。	見本を参考にレポートを作成する。インターネットの引用だけにしない。	論文読解	採用試験論文例	良い文章に触れる。
レポート発表	レポート発表	発表の方法を知る。	卒業論文の書き方	卒論見本	卒業論文の意味・卒業論文の基礎知識
質疑	レポートに対する質疑	質疑が発表内容を深めることを体験する。			

4.2 スタディナビゲーションA

スタディナビゲーションAの内容は、スチューデント・スキルの習得が中心である。スチューデント・スキルの内容である自己紹介（他己紹介）・学生生活の過ごし方（学生ガイドブック）・ショーアンドテル（私の宝物）・浦和大学建学の精神について学ぶ際も、人前で話す力、質問する力、発表する力を育成するスタディ・スキルの育成を意識して実施した。最後に実施した「間主観的に考える」では、平田オリザ氏の「子どものセリフのコンテキスト」を使用して、専門領域へ意識を持たせる内容を取り入れた。

「子どものセリフのコンテキスト」では、子どもの言葉にはどんな意味があるのかを問うことの必要性を考えた。「子どものセリフのコンテキスト」での学生Sの記述例を示した。(資料1) この学生はどんなふうにも子どもに応えたらいいのかを「頭が痛くなるほど」考えている。子どもの言葉になんと応えるかという正解を得ることよりも、このように子どもに対してどう応えるかを「頭が痛くなるほど」考えることが重要な学びである。



(資料1) 学生Sの記述例「子どものセリフのコンテキスト」

4.3 スタディナビゲーションB

スタディナビゲーションBの中心課題は、自分の好きな本の紹介のレジメを作成し、発表することである。内田樹の『先生はえらい』を例にA4一枚のレジメの書き方見本を提示した。レジメの作成では、本の題名・著者・出版社・発行年・著者紹介・著者の作品例を明示してから、あらすじだけではなく、自分がその本を紹介する理由を明記させた。学生が紹介した本には、重松清『流星ワゴン』、東野圭吾『ラプラスの魔女』、鎌田洋『ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと』、坪田信貴『学年ビリギャルが1年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話』など各自の関心が現れた本が紹介された。自分の好きな本についての紹介であるため、各自の本の紹介は大変興味深い発表となった。各自が紹介した本の中から有川浩『植物図鑑』から一部を抜粋(資料2)して全員で読みを深め、議論をする場を設定した。『植物図鑑』では、教師に質問したときの子どもの悔しい思いが描かれている。

資料2

視線を落とした芝生の中、紅色の星形の小花があちこちに咲いている。草の姿はまるでミニチュアのアヤメのようだ。

ああ、これ。

「……………杏奈ちゃん、どうしたの？」

サクラとの取っ組み合いに一段落ついたのか、お兄さんが気遣うような声で尋ねた。

何でもない、と頭を振ったが、お兄さんは杏奈の視線の先をたどったらしい。

「それ？可愛い花だよね」

「でもくだらないって」

杏奈は短く呟いた。言葉は短くしないと喉が詰まってしまうそうだった。

と、お兄さんはサクラをかましながら何気ないふうと言った。

「かわいいことはくだらないよ」

取り立てて杏奈を慰めようとしている訳でもなく、ただ単純に事実を事実として気負いなく述べただけ、という口調に意表を衝かれた。

喉に詰まっていた固まりがすずつと溶ける。

「……………でも、先生が」

お兄さんは目顔で「ん？」と聞いた。その押しつけがましくない促しに、却ってするりと言葉を引き出された。

「理科の教科書にタンポポの写りがあったの」

授業は草花の造りについてのもので、身近な植物としてタンポポの写りが載っていた。

担任の若い先生は授業を進め、「何か質問はありませんか？」と生徒の訊ねた。

「何でもいいですよ」と。質問はありませんかと言いながら、問答無用で指名するのはお約束だ……………

有川浩(2009)『植物図鑑』角川書店より抜粋

資料2 有川博(2009)『植物図鑑』より示した資料の一部

一方、紹介された本の中には、ゲームが原作の本や漫画が原作の本があり、文章として課題があると思われるものが多くみられた。今までに読んだ本は紹介した本1冊だけだという学生もおり、本を読む習慣がない学生が少なからず存在することが明らかになった。大学での学びは本を読むことを習慣とすることが必要である。スタディナビゲーションBで示された学生の読書の実態からスタディナビゲーションDで課題図書を読むことに取り組むこととした。

また、スタディナビゲーションBでは、本の紹介と並行して、文章の書き方を指導した。文章の書き方では、要約・5W1H・目標に合わせて文章を書くという段階を追って書く力をつけることを目指した。書くことは考えることであり、大学は考える場所である。考えるために書く力の育成はスタディ・スキルとして基礎的な力となる。

表2にスタディナビゲーションA・Bで育成する力を示した。

表2 スタディナビゲーションA・Bで育成する力

スタディーナビゲーションA	履修登録指導	自己紹介・他己紹介	私の宝物	2年生との交流会企画	教職入門会館の振り返り	学生生活ハンドブック	教員採用試験問題	漢字テスト	インターシップAの記録	しらざぎ祭準備・振り返り・会計	実学に勤め徳を養う	期末試験の受け方・レポートの書き方	間主観的に考える
授業方法		2人組で他己紹介	S&T	討議	発表	担当箇所を人に説明する。				話し合いの進め方	語句を調べる・批判的に検討	レポートの書き方	2人組でセリフ練習
資料・備考			各自の宝物を持参		事実と気持ちを分ける。	板書案を作成		リメディアル教育	記録の書き方				平田オリザ「子どものセリフのコンテキスト」
スケジュール	スキル	○	○	○	○	○			○	○	○	○	
スタディスキル	話す		○	○									○
	聞く		○	○									○
	書く				○			○				○	
	調べる												
	発表する					○							
	質問する		○	○			○					○	
キャリアデザイン	専門性												○
	教員採用						○	○					

スタディーナビゲーションB	履修届	本の紹介見本	本の紹介	しらざぎ祭準備	どんな教師を目指すのか	教員採用試験の概要	文章の要約・5W1H	論文執筆・修正	本の紹介から	入学前セミナーの準備	目的に合わせて論文を書く	採用試験見本論文の分析
授業方法		発表	レポート作成		印象残った先生			論文作成	発表を深める。		論文作成	分析
資料		内田樹「先生はえらい」	各自の紹介したい本		授業公開日	採用試験ハンドブック		上田ひでみ「小論文クイズドリル」	有川浩「植物図鑑」			採用試験論題
スケジュール	スキル	○		○						○		
スタディスキル	話す		○									
	聞く		○									
	書く	○	○		○		○	○	○		○	○
	調べる											
	発表する			○								
	質問する			○								
キャリアデザイン	専門性								○			
	教員採用				○	○						○

4.4 スタディナビゲーションC

スタディナビゲーションCは、レポートの書き方を中心に展開した。レポートの課題を表3に示した。表3に示した19の教育に関する課題に個人で取り組んだ。レポートの書き方を学びながら、教育に関する基礎用語を学ぶことを目的としている。レポートの書き方の例として「アクティブ・ラーニング」についてのレポートを見本として示した。レポートでは、①2冊以上の書籍を引用文献としてあげること、②引用の仕方（自分の意見と引用を混在させないこと）、③引用文献の示し方の3点を確認し、A4で2枚以上のレポートを作成し、レポートの発表を実施した。レポートの指導は大学の授業でのレポートの書き方と3年次からの卒業論文へつなげることが目的である。

表3 スタナビCレポート課題

スタナビC レポート課題				
スタナビCでは教育に関する課題についてレポート作成、発表を実施します。				
目的:レポートの書き方を知る。 教育課題への知識を深める。				
※需要事項			※発表予定日は変更される可能性があります。	
			※1回前には発表できるように準備してください。	
		テーマ	担当	
※		アクティブ・ラーニング	伊深	発表予定日
		主体的・対話的で深い学び 「見方・考え方」	伊深	
	1	チーム学校・キャリア教育		
※	2	特別の教科・道徳		
※	3	小学校の外国語活動		
	4	評価・反転授業		
	5	学校におけるICT活用 NIE活用		
	6	体罰		
※	7	いじめ		
	8	不登校・虐待		
	9	こどもの貧困		
	10	学級崩壊		
※	11	インクルーシブ教育		
	12	LDあるいはADHD傾向の児童		
	13	埼玉県・さいたま市の教育 (GSを含む)		
	14	小1プロブレムと小幼連携		
	15	保護者との連携・地域連携		
	16	デューイ・シュタイナー・ブルーナー・ビゴツキー		
	17	空海 最澄		
	18	伊沢修二 福沢諭吉 森有礼		
	19	ハロー効果 ピグマリオン効果		
	20			
	21			
レポートの下書き締め切り ()月()日 伊深 修正したレポートを22部印刷してください。				

また、資料3に示した外山滋比古の『知的な聴き方』から、ことばの習得の順序は「聴く、話す、読む、書く」の順であること、学校の教育の中では書くことだけでなく、聴くと話すは重要であることを確認した。

ことばを文字から教えるのは本来おかしいことなのだが、外国でもやっていることだし、おかしいと思う人もいなかった。

ことばの習得の順序は、「聴く、話す、読む、書く」の順であろうが、学校のことばの教育は、はじめの二つは落としておこなわれた。

十九世紀はじめに、ヨーロッパ、アメリカで考えた教育がそうだったから、日本は当然のようにそれを真似たのである。

(中略)

学校教育にしても、文字を読むことから始める。「聴く力がなければ、読むことはできない」などと考える小学校教師はいなかった。

「聴くのは放っておいてもできるようになる。特に教えようとしないうちでも、みんな、聴くことが出来るようになる」

根拠もなくそんなことを考えた。

日本人が考えたのではなく、十八世紀のヨーロッパでそう考えて、初等教育を充足させた。

日本では、小学校のできる前に寺子屋があった。感じがあった。訳も分からぬ子どもにも、論語を教えた。教えたというより、声を出して読ませた。音読である。

外山 滋比古 (2018) 『知的な聴き方』 P61～62 85～87
大和書店より抜粋

資料3 外山慈比古『知的な聴き方』抜粋

その後、レポートの発表と並行して毎時間1～2名が齊藤孝の『声に出して読みたい日本語』①から表4に示した各自が選んだ箇所を朗読あるいは暗唱するアクティビティを実施した。教師にとって声は重要な要素であることを意識させた。

表4 声に出して読みたい日本語分担表

声に出して読みたい日本語

大きく声に出して詠みあげる。朗読(ろうしょう)する)。暗誦(あんしょう)してもよい。

	書名	作者	冒頭	担当
1	平家物語		祇園精舎の鐘の声……	
2	方丈記	鴨野長明	ゆく河の流れは絶えずして……	
3	春望	杜甫	国破れて山河在り、城春にして草木深し……	
4	奥の細道	松尾芭蕉	月日は百代の過客にして……	
5	枕草子	清少納言	春はあけぼの。やうやう白くなりゆく……	
6	道程	高村光太郎	僕の前に道はない。僕の後ろに道はできる。	
7	論語	孔子	子曰く、学びて時にこれを習う……	
8	徒然草	吉田兼好	つれづれなるままに、日くらし……	
9	伊豆の踊子	川端康成	道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に……	
10	源氏物語	紫式部	いづれの御時にか。女御・更衣あまた……	
11	舞姫	森鷗外	石炭をば早や積みはてつ	
12	曾根崎心中	近松門左衛門	この世のなごり。世もなごり	
13				
14				
15				
16				
17				
18				
19				
20				
21				
22				

その他候補
弁天娘女男白波
風の又三郎
ガマの油
国定忠治
永井荷風
荒城の月

森の石松
土佐日記
中原中也
早口言葉
寿限無
春の七草
風姿花伝

4.5 スタディナビゲーションD

スタディナビゲーションDでは、2～3名で課題図書を読みレポートを作成した。課題図書のレポート見本は、柴田義松『批判的思考力』を育てる』を提示した。レポート作成では、本の内容を説明するだけでなく、本の内容の中からみんなで話し合っていたいテーマを作成してグループ討議を実施することを課題とした。グループ討議は、課題図書の担当2名が2グループ（担当が3名の場合は3グループ）に分かれ、各グループで担当が司会を務めて討議を進行した。

学生が作成した8つのテーマと課題図書は、テーマ①字の下手な教師はどうしたらいいか：大西忠治『授業づくり上達法』、テーマ②教科書にない題材を用いた授業について：金森敏郎『太陽の学校』、テーマ③喋らなくてもいい教師とは：重松清『せんせい』、テーマ④「教える」と「学ぶ」の違いはなにか：佐藤学『教師花伝書』、テーマ⑤先生がえらいと思うことの意味：内田樹『先生はえらい』、テーマ⑥ヒトが人になるとはどういうことか：太田堯『教育とはなにか』、テーマ⑦隠れたカリキュラムとは何か：荻谷剛彦『学校ってなんだろう』、テーマ⑧「考える」の意味を考える：佐伯ゆたか『考えることの教育』・汐見稔幸『考えることの教育のすすめ』である。

以下にこのテーマについての討議について記述された学生RのスタディナビゲーションD終了後の記述を示す。自分たちの作ったテーマについての討議がどのように進んだかが示されている。

「本を読み、前もって答えを用意してきた担当者は、まさか否定的な意見が出るとは思わず、戸惑ってしまう。その戸惑いから新の（本当の）自分の意見での考察・討議が始まったと考えている。本を読んだから、その文をただ暗記したことを伝えようとしている場から、その優位性を奪い、互いがフラットになった討議からさまざまな学びが生まれたと考えている。よって教師も一緒に学ぶ授業づくりがよりフラットに近づき学びの発展性がある」

学生Rの記述からは、テーマについて、担当者への批判的意見が出されたことによって、テーマについて伝えるだけでなく、討議の中で学びが深まったことが記述されている。

グループ討議後には、そのテーマについて全体討議を実施し、最後に各自がそのテーマについて考えたことを記述した。討議後の記述は200字で実施していたが、学生からもう少し書きたいことがあるという希望が出て400字まで増やした。学生からの要望で文字数を増やしたが、このように段階的に文字数を増やすことを意識的にすることが有効である。そこから教員採用試験の小論文の800字に繋げて書く力をつける。

表5にスタディナビゲーションCDで育成する力を示した。

表5 スタディナビゲーションC・Dで育成する力

スタディナビゲーションC	履修登録	声の力	声に出して読みたい日本語	レポートの書き方	引用文献の示し方	レポート作成	レポート発表	さいたま市の教員採用試験	新入生歓迎会準備	教育実習希望調査	採用試験模擬テスト
授業方法		資料読解	音読	講義	講義	調べ学習	発表				
資料・備考		外山慈彦「知的な聴き方」	斉藤孝「声に出して読みたい日本語」	レポート見本「アクティブ・ラーニング」	レポート見本「アクティブ・ラーニング」	2冊以上の本を読むこと	質問する力	ゲストティーチャー			過去問
スケジュールスキル		○							○	○	
スタディスキル	話す										
	聞く		○								
	書く			○	○	○					
	調べる					○					
	発表する						○				
	質問する						○				
	調べる					○					
	批判する 討議する										
キャリアデザイン	専門性 教員採用		○					○			○

スタディナビゲーションD	採用試験問題	論文読解	レポートの書き方	討議テーマの作成	発表8回	討議8テーマ	さいたま市の教員採用試験について	採用試験問題	児童が考える授業	論文読解	教育における多様性	卒業論文の書き方	ダイバーシティ・インクルージョン
授業方法		採用試験論文問題	レポート例の提示	グループ活動	発表	グループ討議	ゲストティーチャー	採用試験問題	学生の文章のキーワード発表	採用試験論文問題	新聞記事の読解	講義	多様性についてのパワーポイント発表
資料		唯峻淑子「対話する社会へ」	柴田義松「批判的思考力」を育てる	8冊の本を読み込む	グループ毎に、担当が司会をして討議を進める。		さいたま市教育委員会	過去問	討議テーマ⑧を深める	森博嗣「孤独の備前」	福岡伸一・フレデリックみかこ対談「誰も否定されないこと」	卒論の取り組み方	学生による自主レポート
スケジュールスキル													
スタディスキル	話す			○	○	○			○				
	聞く			○	○	○			○			○	○
	書く	○	○	○		○				○	○		
	調べる				○								○
	発表する				○								○
	質問する			○		○							○
	批判する 討議する					○							○
	キャリアデザイン	専門性 教員採用	○	○	○	○	○		○	○	○		○

5. スタディナビゲーションにおける学生の学び

初年次教育として実施したスタディナビゲーションA・B・C・Dで学生が何を学んだかをスタディナビゲーションD終了後の学生の記述の分析を表6に示す。分析は、学生の記述を内容毎に項目に分類した。

表6 学生の記述分析（スタディナビゲーションD終了後）

n = 17

項目	「文書能力」			「学びの方法」					「他者と学ぶ」			「そのほか」	
	書く	文章の 評 価	本や資料 を読む	発信する	討議する	批判から 学 ぶ	考える	調べる	多様性	相互に 学 ぶ	グルー プ活 動	教育につ いて再考	向上心
項目数	9	1	9	7	10	2	5	2	6	9	3	2	2
項目数 合計	19			26					18			4	

学生17名の記述内容は、「文章能力」19項目、「学びの方法」26項目、「他者から学ぶ」18項目、「その他」4項目に分類された。具体的な記述例を表7に示す。スタディナビゲーションでは文章を書くことだけではなく、学び方や他者と学ぶことの意味が学ばれていた。その他の具体例に示した学生Wは、「人にものを教える」ということの難しさを学んでいた。教育という仕事に終わりはなく、これからこの大学で教育について学び続けることへ繋がる学びである。

表7 学生の具体的な記述例（スタディナビゲーションD終了後の記述より）

文章能力	学生I	特に印象に残っているのは、毎回授業の最後に書く文章（コメント）です。私は昔から文章を書くことが苦手でした。なので、毎回書くことで鍛えられました。
		今でも、苦手ですが、自分の文章に自信ができました（接続語や語尾の違い、話し言葉との違い）それも伊深先生が私の書いた文をほめてくださり、次週に配るプリントに毎回私の文を載せてくれたからです。私は文章が上手に書けるようになったことは、自分にとって大きな成長だと思います。
学びの方法	学生K	このスタナビで学んだことはたくさんあるが、中でも自分が覚えているのは、インプットしたことをアウトプットすることだ。頭に入れたことは、外に出すことで記憶に定着する。今までやったことは意外と頭に入っていてやってよかったと思う。他にも外に出すに関連して、発表する機会も多く、良い経験になった。
	学生H	あまり触れてくるものがなかった内容だったから、この意味はなんだろうと気になったことをすぐ調べることが習慣になった気がします。
	学生R	討議したり、論文読解したりして、言葉の難しさを知りました。今まで当たり前のように使っていた言葉も、よく考えてみたら、どういう意味？って思う言葉も多かったです。
他者と学ぶ	学生T	人間の暖かさ、やさしさ。文章を読み、その文章をまとめる力。討論を通してより良いものに近づく感動。協力すること。
	学生G	一文の中にある言葉をピックアップして討議させたのは楽しかった。たった2文字から多くの学べるがあった。最後はレポートの作成方法と、発表の仕方である。レポートのネタを収集し、相手にわかるようにつくりあげていくことを理解した。
	学生Y	昔から人の意見に流れに身を任せる癖があり、広い場だったりすると無言で終わることが多かったが、その時は自分の意見を言えし、それを最後まで聞き、意見を言うといったグループ活動ができた。その事が自分の成長を知れたし、教師に必要なことを学ぶことができた。
その他	学生B	学科のみんなと時を過ごしていると、一人一人の性格や考えていることの違いが見えてきました。その性格や考えに悪いはないとスタナビで学ぶことができました。全員で本を読み、それぞれテーマを決めたときは、正直毎回難しいテーマで考えるのがイヤでした。学科のみんなはそんな難しいテーマについてしっかり考え、自分の考えを発表してくれた。それを繰り返していくうちに、私も頑張らなないと、と向上心が生まれました。ゼミになっても、学校教育学科の2年生は変わらないと思うので、仲間と卒業できるように頑張る。
	学生W	自分がいかに「人にものを教える」ということをナメていたか。学びは何にでも、誰からでも得られること。教師としての矜持・信用・尊重・対立。自分の教育者としての能力。自分に素直に生きること。多すぎて書ききれません。筆舌に尽くしがたいです。

6. 終わりに

本論は2018年・2019年度のスタディナビゲーションにおけるスタディ・スキルの育成に焦点をあてた初年次教育の実践報告である。初年次教育を石倉ら（2008）が提案しているように3年次から専門教育への導入と位置づけて実施した。本論では、専門教育の導入としてのスタディ・スキルの育成として、人前で話す力、聞く力、質問する力、書く力、本を読む力、共同して課題に取り組む力、討議する力をつけることができた。また、森ら（2008）が提案しているように初年次教育に協調学習を取り入れて学ぶことで、文章を書く力を身につけるスキルだけでなく、学びの方法、他者と学ぶことの意味を捉えることとなった。

本論の課題を二つ上げる。一つは図書館の使い方を司書の方と共同で実施することである。図書館の利用方法を取り入れて、さらに大学での学びの基礎である本の検索能力を身につけさせることが必要である。二つは、より多くの良い文章を読む時間を確保することである。文章力を高めるには良い文章に多く触れることが有効である。

追記：2018年度・2019年度の初年次教育の課題として、専門性に偏っていることが指摘され、2020年度からは、感謝と謝罪ができることを基本とする初年次教育を実施することが確認されている。

【註】

- [1] 山田礼子, 大学の機能分化と初年次教育—新入生像をてがかりに, 日本労働研究雑誌, p31-43, 2012
- [2] 山田礼子, 2 初年次教育の現状と未来, 世界思想社, p11, 2013
- [3] 文部科学省, 平成25年度の大学における教育内容の改革について (概要) 文部科学省, 2015
- [4] 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」(平成28年度) (https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336.htm)
- [5] 石倉健二・高島恭子・原田奈津子・山岸利次, ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題, 長崎国際大学論叢第8巻, p175, 2008
- [6] 濱名篤, 「初年次教育の必要性と可能性」, 『大学と学生』, p11, 2008
- [7] 土居浩, 初年次教育の動向, ものづくり大学紀要 第1号, p57, 2010
- [8] 森朋子・山田剛史, 初年次教育における協調学習が及ぼす効果とそのプロセス—が学生同士の〈足場づくり〉を中心に—, 京都大学高等教育研究 第15号, p37-46, 2009
- [9] 楠見孝・田中優子・平山るみ, 批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価, 認知科学 19 (1), pp69-82, 2012

【参考文献】

- [1] 吉原恵子・間瀬泰尚・冨江英俊・小針誠, 『スタディスキルズ・トレーニング』, 実教出版, 2017
- [2] 齊藤孝, 『声に出して読みたい日本語』, 草思社文庫, 2011

Summary

Learning of the Study Skill in the First Year Experience
:Practice Example of School Education Course, 2018-2019

Shoko Ibuka, Toru Uchida

Urawa University Faculty of Children has set up a subject called Study Navigation as the first year education. This report is a Practice Example of the Study Navigation of 2018, 2019. In this case, a Study Skill was focused on. The student learned six study skills, talk in front of a person, listen, ask a question, write, criticize, discuss. Three that a student learned are way of writing of the sentence, learning method, learning others. It is the basics of three learning skill of the university education.

Keywords First Year Experience Study Skill Way of Writing
Learning Method Learning Others

(2021年5月13日受領)

